

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ブエノスアイレスのスペイン語イントネーションの実験音声学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yanagida, Reina メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1476

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ブエノスアイレスのスペイン語イントネーションの実験音声学的研究

柳田 玲奈

本研究の目的は、アルゼンチンのブエノスアイレスのスペイン語イントネーションを実験的手法を用いて分析し、その結果からブエノスアイレスのスペイン語のイントネーションパターンを探ることと、その記述のための表記法を音韻論的に検討することである。本論文は 5 つの章から成る。

第 1 章「導入」では、近年のイントネーション研究について概観する。自律分節音韻論と韻律音韻論以降のイントネーション研究において Goldsmith によって自律分節韻律理論 (AM 理論) が提唱され、近年のイントネーションの音韻論的研究においてはこれが標準的な理論として扱われている。AM 理論ではイントネーション曲線を H (高) と L (低) という 2 つのレベルのトーンの連鎖として表すことができ、ピッチアクセントと句アクセントと境界トーンを組み合わせることでピッチ変動を記述していく。主に英語イントネーションに関する先行研究の流れを概観した後、特にスペイン語のイントネーションに関するこれまでの研究についてもいくつか紹介する。Navarro Tomás や Bolinger、Fontanella の研究を具体的に見ながら現代までのスペイン語イントネーション研究の歴史を概観し、Sosa や Hualde や Beckman らによる AM 理論に基づいた分析についても解説する。そして最後に、本論文中で用いるいくつかの用語の定義も行う。

第 2 章「イントネーション表記法」では、AM 理論に基づいたイントネーション表記法として現在標準的だとされている ToBI (Tones and Break Indices) と、それをスペイン語に応用した Sp-ToBI および ToBI-A を紹介する。ToBI は Silverman らによって特に英語イントネーションを記述するために開発されたもので、ピッチの高低に基づくメロディーパターンを示すトーン表示層や、語の境界や休止を示すブレイクインデックス表示層などを設けてイントネーションパターンを表記する。そして主に英語イントネーションのためのものであった ToBI はさまざまな個別言語に応用されるようになり、その中でもスペイン語のイントネーションパターンを記述するためのものは Sp-ToBI と呼ばれる。本章ではまずオリジナルの ToBI の仕組みを概説しながら、AM 理論に基づいた J.

Pierrehumbert の英語イントネーションの枠組みを概観し、その後スペイン語イントネーションを記述するための Sp-ToBI を紹介するとともにその基となっている音韻論的枠組みも概説する。そしてさらに、アルゼンチンのスペイン語イントネーションを記述するために Gurlekian らが考案した ToBI-A を紹介し、ToBI や Sp-ToBI との違いを概説する。ToBI-A ではピッチ変動をより詳細に記述するために、アクセントパターンの制限をなくしたり、ピッチの高さを数値で示す ERB (等価矩形帯域幅) という尺度を取り入れたりしている。

第 3 章「Amper プロジェクト」では、現在 Universitat de Barcelona を中心に進められている国際プロジェクト Atlas Multimedia de la Prosodia del Espacio Románico (AMPER) を紹介する。このプロジェクトはロマンス諸語使用地域のさまざまな研究機関の参加のもと進められており、スペイン語に限らずロマンス系言語のさまざまな地理的韻律バリエーションを調査・研究するもので、すべてのロマンス諸語のイントネーションを対照して韻律地図を作成することを目指している。スペインやアメリカ大陸の各地で行われている Amper プロジェクトに基づいた先行研究をいくつか紹介した後、現在までに筆者が発表した Amper に関連する研究の内容を要約する。ここではいくつかの分析により、Amper プロジェクトにおいて提案されているインフォーマントの条件について再考したり、ブエノスアイレスのスペイン語のリズム体系について計算に基づいて論じたりしている。

第 4 章「ブエノスアイレスとマドリードのイントネーション比較実験」では、ブエノスアイレスとマドリードのインフォーマントからそれぞれ短い定型文の平叙文と疑問文を録音し、それらを音声学的に比較している。コーパスは第 3 章で紹介した Amper プロジェクトの基準に基づき作成されたもので、音節数とストレス音節の位置についてコントロールされた NP + V + PP 構造の定型文を使用している。

ブエノスアイレスのコーパスを分析した結果は次のようにまとめられる。

まず語末から 3 音節目にストレスのある NP のピッチ曲線を観察すると、ストレス音節ではピッチの卓立がなくむしろ NP 内での最低値をとっている発話がほとんどである。そしてそこから語末に向けて上昇し、NP 末で最高ピッチに達している。これは句アクセント H-の影響と考えられ、NP と V に ip の境界があ

ることを示している。

次に、全体疑問文において NP のストレス音節でピッチ頂点を作り NP 末へかけて低いピッチまで下降している発話が多く見られる。ここでもやはり ip の境界があることが明らかであり、そして句アクセントは L-となる。またその後の V では低いピッチからストレス音節に向けてあるいはその後の音節へ向けて上昇する。

さらに、全体疑問文の文末である PP ではストレス音節が語末から何音節目にあるかによって典型となる文末イントネーションが異なり、上昇調 (H·H%) で終わる場合と上昇下降調 (H·L%) で終わる場合とがはっきりと確認される。

「ブエノスアイレスらしさ」を探るため聴覚印象をもとにいくつかの点について分析した結果によると、まず 1 つ目の特徴としてブエノスアイレスの平叙文では文頭のピッチアクセントに H* が付与される確率がマドリードよりやや高く、逆に文末のピッチアクセントではマドリードほど H* はなかった。つまり文頭では単語を強調するようにストレス音節をマークしながら発話し、文末へ向けて徐々に単語が流れるようにストレス音節でも卓立を持たせることなく発話末を迎えるというパターンが得られる。2 つ目に、ブエノスアイレスの発話ではピッチの上下幅はそれほど大きくないが、ピッチが上下する頻度が多い。さらにピッチ曲線の傾きが変わりやすい傾向も見られ、ブエノスアイレスのイントネーションを特徴づける要素として注目すべきである。3 つ目に、ブエノスアイレスの発話では同じ音節数でもマドリードの発話より発話持続時間が長く、ブエノスアイレスの話し方の悠長さを演出していると考えられる。

上記の点を踏まえつつ、最後に、ブエノスアイレスのスペイン語イントネーションを記述するには従来の音韻論的表記法では不足である可能性が高く、1 音節内で上昇や下降の角度が変化している場合やストレス音節以外の箇所でもピッチの変動がある場合など、これまで記述の陰に隠れてしまっていた点にこそブエノスアイレスのイントネーションの素性のありかを求めることができる可能性を示唆する。

以上のように、さまざまな理論や手法で近年研究が進んできているスペイン語のイントネーションについて、本研究においても実験音声学的手法を用いて特にブエノスアイレスのイントネーションを記述するべく分析・考察をしてきた。イ

ントネーションの音韻論的側面と合わせて方言学的な記述の必要性にも目を向け、今後のイントネーション研究への足掛かりとなるものが示されたと考える。